今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.246

通算 No.398

青　木　行　雄

時代をみつめて

戦後75年、コロナ禍の中
戦没者追悼式（2020年8月15日）と
「昭和天皇とマッカーサー元帥の会見」

政府広報｜厚生労働省

8月15日は、戦没者を追悼し、平和を祈念する日です

「本日、日本武道館で、政府主催の『全国戦没者追悼式』が行われます。
皆さまには職場やご家庭などで、正午から1分間の黙とうをお願いします。」

終戦から75年の節目の15日、政府主催の全国戦没者追悼式が日本武道館で開催された。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて参列者は過去最少の540人となったが、戦没者約310万人を悼み、平和への誓いを新たにした。

追悼式には遺族193人のほか、天皇、皇后両陛下や首相をはじめとする三権の長らが参列した。正午から1分間、参列者全員で黙とうを捧げた。

天皇陛下は、深い反省と再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願うと述べ、コロナ禍について、私たち皆が手を共に携えて、この困難な状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願うと述べた。

昨年は遺族4,989人を含む約6,200人が参列したという、今年もこの武道館だが、いま新型コロナウイルスの感染が拡大中でもあるので、重症化しやすい高齢の遺族に配慮することから20府県が参列を見送ったという。1963年（昭和38年）に始まった追悼で自治体単位の欠席は、台風などによるものを除けば初めてと言う。今回参列できない人のために、厚生労働省は動画配信サイト（ユーチューブ）で式典終了まで同時配信した。

東京オリンピックの為にリフォームし、新装なった日本武道館、8月15日戦没者追悼式が行なわれた

戦争を体験した戦前生まれの世代は減り続け、

75年目の戦没者追悼式がこれから始まる
整列された式典直前の会場風景

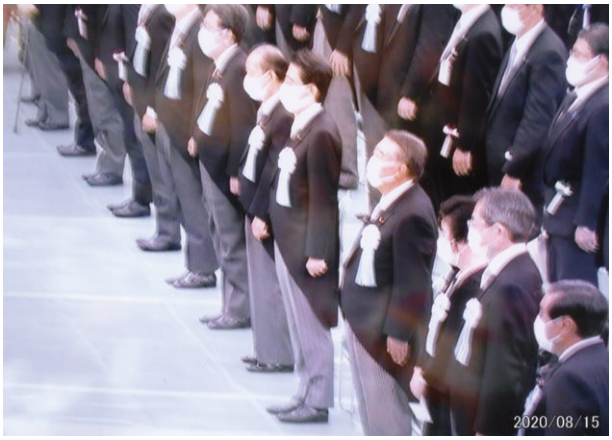
菊花にかこまれた戦没者霊前に並ぶ両陛下のお姿

2019年10月の時点で総人口の約15％程になったといわれる。

参列した遺族の最高齢は北海道の長屋昭次さん（93才）で、朝日新聞のインタビューによると、感染への懸念からためらいもあったが、私の年齢ではこれが最後かもしれない、元気で長生きしていると戦死した兄に伝えたいと参列を決めたという。

霊前において追悼文を読まれる陛下

会場受付では検温し、マスクの着用とこまめな手指の消毒を徹底し、座席は全席指定で間隔を１メートル以上あけた。君が代は斉唱せずに演奏のみとして、演奏も管楽器を使わない異例の対応をとったのである。厚生労働省によると、来場者に発熱などの症状がある人はいなかったようである。



霊前において、新型コロナウイルス拡大の中、全員マスク着用にて整列する関係者

それでは「天皇陛下」のおことば全文を記してみたい。

「本日、戦没者を追悼し平和を祈念する日にあたり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来75年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、新たな苦難に直面していますが、私たち皆が手を共に携えて、この困難な状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展をお祈りします。」と述べられました。

そして、安倍晋三首相の式辞、全文を記してみた。

「天皇・皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、戦没者のご遺族、各界代表のご列席を得て、全国戦没者追悼式を、ここに挙行いたします。

あの苛烈（かれつ）を極めた先の大戦では300万余の同胞の命が失われました。

祖国の行く末を案じ、家族の幸せを願いながら、戦陣に散った方々。終戦後、遠い異郷の地にあって、亡くなられた方々。広島や長崎での原爆投下、東京をはじめ各都市での爆撃、沖縄における地上戦などで、無残にも犠牲となられた方々。今、すべての御霊（みたま）の御前にあって、御霊安かれと、心より、お祈り申し上げます。

今日、私たちが享受している平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い犠牲の上に築かれたものであることを、終戦から75年を迎えた今も、私たちは決して忘れません。改めて、衷心より、敬意と感謝の念を捧げます。

いまだ帰還を果たされていない多くのご遺骨のことも、決して忘れません。1日も早くふるさとにお迎えできるよう、国の責務として全力を尽くしてまいります。

戦後75年、我が国は、一貫して、平和を重んじる国として、歩みを進めてまいりました。世界をより良い場とするため、力の限りを尽くしてまいりました。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。この決然たる誓いをこれからも貫いてまいります。我が国は、積極的平和主義の旗の下、国際社会と手を携

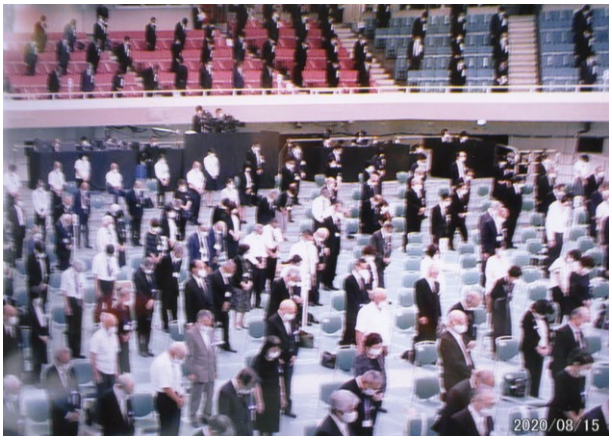
両陛下の御前に進み出て追悼文を読む前の安倍首相、かつてないマスク姿

霊前でこれから追悼文を読みあげる前の安倍首相のマスク姿

君が代を演奏する奏者達　こん回は管楽器は使わなかった。全員がマスク姿である

えながら、世界が直面している様々な課題の解決に、これまで以上に役割を果たす決意です。現下の新型コロナウイルス感染症を乗り越え、今を生きる世代、明日を生きる世代のために、この国の未来を切り開いてまいります。

終わりに、いま一度、戦没者の御霊に平安を、ご遺族の皆様にはご多幸を、心よりお祈りし、式辞といたします。



起立して　君が代の演奏を聞きながら、追悼する参加者。マスク姿がいたいたしい

令和２年（2020）８月15日

内閣総理大臣・安倍晋三

新型コロナウイルスの影響で高齢の遺族らが参列を見送る中、杉山英夫さん（82）＝静岡市＝は遺族代表で追悼の辞の大役を担った。

本人の口から「戦後75年たっても100年たっても、戦争の悲惨さ、怖さ、理不尽さを伝えていかなければいけない。何があっても出席するつもりだった」と話したという。

ナシ園を営んでいた父、甚作さんに召集令状が届いたのは昭和18年３月であった。本人英夫さんは当時５歳であった。神社で肩車などしてくれた思い出があるという。浜松市にあった高射砲第一連隊に母たちと一緒に赤飯やおはぎを持っていき、食事をしたのが最後の別れになった。

甚作さんは本土防衛のためにフィリピン・ルソン島に赴き、20年６月に命を落とした。

「如何（いか）にか懐かしい故郷の山、川を思い、愛しい妻子、優しい家族を夢に見たことでしょうか」追悼の辞では、父や英霊たちの無念を代弁した。

父が亡くなったのと同じ頃、英夫さんは静岡大空襲を経験する。爆撃機音や警報発令のサイレンが今も耳を離れない。戦後数年たち、「父もそのうち帰ってくるだろう」と思っていたところに届いた戦死公報と空っぽの骨箱、家業の農作業中に「父がいれば相談に乗ってくれたかな」との思いがよぎることもあった。

腰が痛む現在も静岡県遺族会会長や日本遺族会理事を務め、孫世代に戦争の記憶を継承する難しさを実感する。コロナ禍で慰霊事業もままならないが、「慰霊は国民の務め、それが恒久平和の道につながる」と信じている。

戦争の悲惨さ、伝えなければと追悼の辞を代表として務められ、日本武道館に参列した「杉山英夫」さんである。

戦後75年、「語りつぐ戦争」の文集の中にあった『朝日新聞』平山幸子さんの一文を書かせてもらう。東京都（83才）

８歳の時、樺太で終戦を迎えた。ソ連軍南下が伝えられる中、母・弟２人と最後の引き揚げ船に乗ることになった。父は許されなかった。大混雑の港、いよいよ別れという時、樺太生まれの母が突然、泣いて父にすがりついた、「この子らと内地で生きていく自信がない……どうせ死ぬなら父さんと一緒にここで死にたい」といいはり、最後といわれた乗船をとりやめた。そして父の知人の旅館に身を寄せた。奥の女中部屋に入って間もなく、ここのご主人が「ソ連兵が来る、静かに」と口止めされた。だが私は尿意が我慢できず玄関近くのトイレに走った。用を足し廊下に出ようとして靴音に気づいた。ドアの上の天窓から階段を上るソ連兵が見えた。ドアの下の隙間から見えないよう足を目いっぱい広げ、両手でノブを押さえる。連行されたら両親とはもう会えないしゃくりあげそうになるのを服の端をかんで必死に耐え続けた。

「さっちゃん」、母の声で無事を知った。左の指がノブから離れず、右手で１本１本はがした。顔も服も涙とよだれでぐしょぐしょだった。数日後、乗るはずだった引き揚げ船が攻撃され沈んだと聞いた。母の弱音がなければ私たちも海の底だったことになる。生かされた命と今も感謝の毎日である。

語りつぐ戦争の話は書ききれない程ある。

私の兄に昭和４年生れの次男「和一」がいた。昭和19年、訓練兵として、当時、満州に渡った。終戦はこの満州で迎えたが、その後、その満州から箱型の貨物列車でシベリアへ連行されることになった。何万人かの日本兵は貨物車にすしづめで何晩も走行した。箱型の貨物車は暗闇で外は見えない小さな窓明かりのみ。不安の何日かであったようだ。貨物車上には見はり兵がいて銃をかまえていたらしい。日中、何十人かの脱走兵は射殺されたようだ。たまりかねた兄も不安の連続に深夜、小窓より走行中の列車から飛び降り脱走した。銃声は聞こえたがだんだん遠くなっていったという。その時５～６人一緒だったというが皆、ばらばらになったようだ。場所は中国かソ連なのかわからず、ろくな食料もなく１ヶ月程さまよったようである。どうして日本に渡って帰って来たのか、聞けなかったが、20年終戦３ヶ月たった11月のおわり頃、服はぼろぼろ、体はやせこけて、仙人のような容姿で帰って来た。シベリアにつれて行かれた何万かの日本兵は苛酷な労働で大凡の人がなくなったと聞く。

そんな運命を背負った兄、和一もけっして幸せな一生ではなかった。人にだまされたり、職業も転々として苦難の人生だったが、90才まで生きて一生をおえた。

2019年（令和元年）10月時点で日本の総人口の15％程が戦前生まれというが、まだとも、もうとも、見方はいろいろある。
戦後75年の追悼式を迎え、関係者はいろんな思いを思い出し、大変苦労された方たちも大勢いる。

1945年（昭和20年）８月15日、私の尊敬する先輩、旭日小綬章を受章され、業界に多大の功績を残し、今も元気で活躍されている。昭和８年生まれの戦前派、「細田安治」様が、「木と共に生きて」木材新聞伝記の中に20年８月15日に感じた事を記されていたので、了解をいただきそのまま部分的に記させてもらった。

「1945年（昭和20年）8月15日、天皇陛下より重大なお言葉があり、ラジオからの陛下のお言葉は途切れ途切れで理解もできなかったが、小谷先生が「どうやら日本は戦争に負けたらしい。」「日本は無条件降伏した、戦いは終った。戦争に負けたことになるが、日本はこのままではない。今日の屈辱を晴らす日が来る。忘れずに、頑張ろう」という意味のことをおっしゃった。口惜し泣きしながらの訓示をはっきり記憶している。

戦後75年目の8月10日、今にも戦争が始まりそうな空の雲、あの日を思い出させた空色であった

日本は、そして私達はどうなるのか、集まった疎開児童のなかには、泣き出す者が出るほどの恐怖感で、これからどうなるのか、どうすればよいのか、強い不安に襲われた。後年、日本は経済大国になりこのときのことを晴らした思いだ。

その年（20年）11月頃、父より戦争は終わったから東京へ帰って来いと指示を受け、焼け野が原の東京へ帰って来た。焼け野が原というが、正に言葉のとおりだ。

千石の自宅から西は箱根の山の向こうに富士山の全容が丸見えだった。東は焼け野が原から朝日が昇る、東西南北何もない焼け野が原だ。豪商の蔵の残骸、開けられた金庫などがポツンポツンと残っている程度だった。このような状態を焼け跡というのか。」

以上が、細田先輩の幼少の頃終戦を向えた時の部分的な感想文である。

最後にどうしても記しておきたい、忘れられない終戦直後の昭和天皇陛下とマッカーサー連合軍元帥との会見を戦後75年目にあえてここに記してみたい。

1945年（昭和20年）年8月15日、天皇陛下の玉音放送が全国を震撼させた、その月の8月30日、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥がパイプ姿で厚木飛行場に降り立った彼は若くして兵隊少尉になり、1903年（明治36年）にフィリピンに赴任した。伝染病にかかったために帰国したものの、再度フィリピンに復任し、45歳で少将になった、大変な秀才であったようだ。

第2次世界大戦ではアメリカ極東軍司令官となり、日本攻撃の責任者となった、ところが日本の猛攻によって彼はオーストラリアに脱出せざるをえなかったようである。

トレードマークともなった、ダグラス・マッカーサー元帥のくわえタバコの容姿、見覚えのある写真である

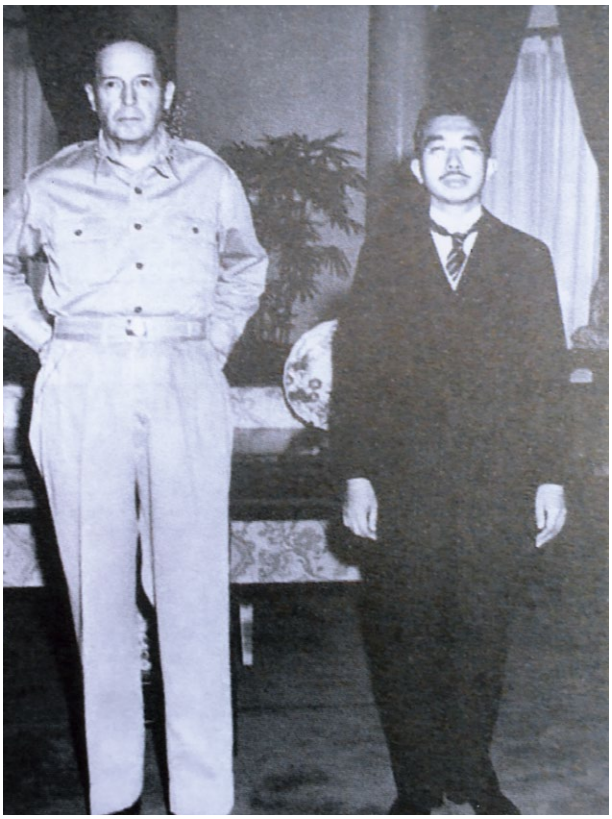
彼の脱出は大統領の命令でもあったが、司令官が逃亡したおかげで、10万人もの米兵が捕虜になった。日本軍は3万人であったから、マッカーサー司令官にとっては屈辱的であり、「日本憎し」という思いが募ったと思われる。

1945年（昭和20年）の当時、約6割の米国民が昭

和天皇の起訴を支持していたといわれる。日本に敵意をもったマッカーサー元帥が、天皇陛下を戦犯リストに入れることが十分に考えられた。このころアメリカ本国から元帥に対して、1,000万人の日本人餓死者を出すようにとの指示があったと言われている。

敗戦の年9月27日、天皇陛下がマッカーサー元帥と会見することになり、陛下は東京GHQの本部を訪ねた。元帥は、他の国の元首がそうであるように、昭和天皇は自分の助命嘆願に来るものと思い込み、高圧的な態度で昭和天皇を迎えた。天皇陛下はモーニング姿で元帥はラフなスタイルだったという。敗戦国の悲哀を象徴する写真である。

昭和天皇の卓上容姿、モーニング姿　緊張のお姿がつたわって来る



ダグラス・マッカーサー元帥はラフなスタイル、昭和天皇はモーニング姿。敗戦国の悲哀を象徴する写真といわれている

元帥から陛下に厳しい主張がされたあと、陛下が元帥に語った言葉を記して見ると、

「敗戦にいたったこの戦争の、いろいろの責任が問われているが、責任は全てこの私にある。文武百官は、私の任命するところですから、彼らには責任がない。私の一身は、どうなろうとかまわない、私はあなたにお任せする」

「私は、国民が戦争を遂行することにあたって、政治、軍事で行ったすべての決定と行動に全責任を負うものとして、私自身をあなたの代表する諸国の裁定にゆだねるためにおたずねした」(参上した)

マッカーサー元帥「それでは、戦争責任をおとりになるか」

天皇陛下「あなたが私をどのようにしてもかまわない。私は、それを受け入れる。私を絞首刑にしてもかまわない」

マッカーサー元帥は、その時の感動をこんなふうに記録している。

「私は大きな感動にゆすぶられた。死を伴うほどの責任、それも私の諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする、この勇気に満ちた誠実な態度は、私の「骨の髄」までも揺り動かした。私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格においても、「日本の最上の紳士」であることを感じ取ったのである」(『マッカーサー回想記』)

天皇陛下は続けた。

「閣下、ここで私が、ぜひともお願いしたいことがあります。先ほど申し上げたように、戦争に関するいっさいの責任は、この私にあります。しかしながら、現状においては、8,000万人の国民が、住む家もなく、食べるに食なし、そういう状況にあります。あたたかき閣下のご配慮を持ちまして、国民の衣食住にお力添えをたまわりますように……」

……揺れ動いた心、マッカーサー元帥……

天皇陛下の思いを知って、マッカーサー元帥の態度が一変した。それから元帥は言葉遣いも丁寧になり、陛下に対して敬意を表すまでになった。

笑顔になった元帥と陛下が握手を交わして、37分間の会見が終わったのである。

玄関での昭和天皇の送迎はしないと決めていた元帥は、会見を終えてから玄関より車まで出て陛下を見送ったというが、慌てて戻ったともいわれる。

次期大統領にとの声があがるほどアメリカ本国では人気があり、日本人に敵意をもっていたはずのマッカーサー元帥は、しばし居室に閉じこもったとも記されている。

マッカーサー元帥はアメリカ本国に1億人分の食料を日本に送るように要求した。この好意が戦後の日本国民を救ったともいわれている。

日本人を餓死させろという本国指示を無視した元帥は、やがてトルーマン大統領と対立するようになり、これが原因かは分からないが司令官を解任され本国へ呼びもどされたのである。

奇跡と呼ばれるほどの驚異的な戦後復興を遂げた我が国であるが、その背景にはマッカーサー元帥の芽生えた日本への情、天皇陛下の国民を思う、うったえが、閣下につたわり、陛下への敬愛の念がよみとれる。

そのとき、歴史がつくられた、戦前生まれの私としてこの出来事を戦後75年目の今、どうしても記しておきたかった。

戦後日本国にもっとも大きな影響をもたらした外国人ダグラス・マッカーサーは1964年（昭和39年）4月5日84才でこの世を去った。

2020年（令和2年）8月30日記

参考資料

朝日新聞
日経新聞
NHK
ちよだタイムズ紙
産経新聞
日本史年表岩波書店